



三七全傳
 占夢庫柯後記二
 第二篇



特別
~13
3148
9



施主と誰ともまづばくして親の八匳を袖色の墓の物と載り捧げて、
 色をくめて来る人、このよき痛く言あふく、あつ怪し
 むべうふむ、吾倚八実の母あふむ。乳母晩指と呼ぶ、あつ身が、
 大和半國、伊賀半國と踏志めり、統井殿の普代の家、隸今市全八郎と
 いひ、人、尚壯の年あり、酒とよ、身より崩して、武士のひびき、
 むべ、あつるに、當主、伊賀、殿、吉稚丸、あつ、あつ、あつ、あつ、
 供あ、今市、赤根、布、施、この三人、あつ、あつ、あつ、あつ、
 求る、布、施、蝶、九郎と相、贈、主、長、酒、は、償、進、せ、刺、主、の、要、金、を、
 横、領、志、し、る、事、終、り、發、覺、て、布、施、り、あつ、あつ、あつ、あつ、
 大、和、を、追、放、せ、れ、と、あつ、あつ、あつ、あつ、
 恥、も、身、も、者、ぞ、馬、を、牽、轎、と、昇、さ、浮、雲、女、と、あつ、あつ、あつ、あつ、

と、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、
 主の、黄金、を、奪、ひ、その、妻、と、奪、ひ、去、り、と、せ、
 時、の、享、禄、元、年、季、冬、六、日、の、あつ、あつ、あつ、あつ、
 赤、根、が、為、り、世、に、去、り、あつ、あつ、あつ、あつ、
 あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、
 夜、の、當、り、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、
 定、め、妻、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、
 増、穂、と、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、
 志、の、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、
 ち、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、
 舞、踏、の、袖、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、あつ、



昔の晩稲ヶ
同樹種と繪て
西海へ走る

露の情と結ぶ夢は僅兩夕の假枕
ちて忽地は有身つゞその物とありひ
めんど郎の更ふ主とも各告ぐ淫奔
が病の冷ふと申してその後の人もつゞ
又三勝は兼久んとて犯せる科はゆへ
志且ど遺る像見ハ次の春夏と増
不 穂の名ありおし末黒の落つとせめて
うもむしゝるふ男児をれど恥はしく
世はまよとてとるもの縁ど同樹どのハ
継又あつてと腹さるる性子をせむ
人さしは罵りめんと母の前ハ面を

と心痛く乳もせめて祖母とあつた
さぬお同樹どのふいしとら乳母とて
嬰兒と兼育せんとせえとらあつた
吾儕ハ小屋へおん身の乳母はまより
子。かくて母の前ハ身を憂とんかひ
をそりて産後とよかく肥とらあつた
その子の秋八月契し月もあつた
あて眞土の旅は外とあつた折
あつた折たとのうちも続く物とら
僧は同一年あつておん身が三才の秋の
比同樹どのハ続井の家とら。風信士

風流女と号らるる。陰陽二口の大刃を研て進せよと仰わされしとあり。
 久家職の面目こまるとして。獲て大和赴きて件の大刃を研めよと悟て風
 流士の刃をいづく毀らう。この程くさる料されれば禁獄せらるり。この條乃
 り承承する。徳井の執権松どの。即由縁ある。殿のおん憤をさし寛
 めて苛に沙汰よまされ。同樹どのの患るく華洛へぬり。ひよけし。この
 まふ活業せむ後の祟もむを。又幸あて崇るく。此度の正を世ま
 ちよれる。が京家の武士。誰り赤刀を研する。りのあぶ。この知の。日の照
 りの。化如きて活業する。は。と尋思して。奴婢の身。の暇を。
 職と止宅を捨。遠く華洛と去て。筑紫の方へと赴き。その。
 の祖母。この。潜然と。うら。は。つ。と。吾。儕。は。宜。あ。や。は。が。あ。る。く。只。ひ。ら。
 子の増穂と喪ひる。哀その袖。よ。い。ま。乾。ぬ。よ。は。る。家。の。艱。あ。り。今。こ。

孫をいせん。住馴る。あ。ま。在。る。ご。ま。同。樹。どの。と。娼。罵。り。虐。め。ら。れ。の。を。
 程方定めぬ。旅の空へ。これ。も。伴。り。途。中。で。餓。死。する。あ。や。あ。ん。隠。れ。と。
 されど。人。も。あ。ら。ん。ご。ま。父。の。今。市。金。八。と。呼。ま。す。徳。井。の。家。隸。は。と。ご。
 流浪の後。往方。を。ま。ね。ど。名。告。あ。り。の。相。執。り。子。ら。む。む。ご。の。り。で。物。
 ごと。今。勅。よ。ら。ら。か。ご。ま。乳。も。た。れ。祖。母。は。伴。り。鬼。と。志。死。同。樹。どの。あ。
 看。死。し。殺。さ。れ。ん。ご。ま。母。の。憐。み。人。と。あ。る。が。却。孫。が。幸。ひ。る。ん。ご。ま。今。こ。の
 火。急。あ。の。憑。て。遣。と。方。も。ほ。情。の。む。折。あ。そ。汝。が。子。と。あ。り。て。故。郷。へ。お。て
 ぬ。て。養。育。て。よ。と。罪。あ。れ。と。う。が。ら。女。兒。が。為。孫。を。為。よ。同。樹。どの。あ。
 ろ。う。隠。して。年。々。竊。よ。り。な。る。銀。六。百。文。あ。ら。う。あり。杉。末。の。り。騙。入。
 物。定。ま。く。も。あ。ね。ど。も。千。世。も。と。孫。が。為。あ。の。松。の。葉。お。ど。志。す。と。あ。り。て
 これ。り。そ。ゆ。れ。孫。と。叮。嚀。お。憑。ま。せ。ぬ。ひ。く。最。上。の。川。よ。あ。ね。も。い。ち。と。い。れ。ぬ

稲舟乃 綱手を失ふ主の零落下。かの涙の水すて。あはれ歎き不善惡と云ふ孫
 どの易ふれと云ひ引つ。東も西も中も。和君を願て在る。この浪連津へ
 及び后の絶て故主の在所と云ふ。元来吾備よ夫あり。よましく奉り一その
 襤褸の中より天りて世と云ふ。楫さうらうらと。孫は吾備の京の刀屋へ乳母よまうて
 三年の後夫婦ひらうよ。後世と云ふ。又子紙奉る幸由は。主ありあれど。由ら
 る。この稲見を。おぼしこそ。天より賜ふ子宝あり。め。と云ふ。いと可愛まの。か
 すぐ親直が。つれもろく。脾痺ふて骨と皮の。瘦體。鍼灸茶餅よ。ひを
 掲と。全三年の医師三昧。刺良人の時。瘦めて。莫くも世と云ひ。六彼六而女の
 親言。銀も。残る。身空の吾備と。稲見。さうも人の。ひら。いと。糸綿。繰り。と
 細き世を。海。の。寡婦。が。手。ひら。よ。て。か。や。か。小。人。と。世。和。子。の。反。哺。の。老。を。海。の
 かげ。爺。は。子。と。名。を。も。つ。け。ど。似。し。人。の。定。う。る。な。べ。這。奴。と。云。ふ。後。の。浪。刀
 丸と。呼。ぶ。を。こ。そ。う。め。れ。と。常。お。呼。ぶ。め。ひ。が。この。浪。連。へ。お。か。き。ま。す。く。実。又。全。入
 どの。名。の。一。字。を。つ。か。良。人。父。四。郎。の。名。以。て。さ。り。あ。り。て。全。ぬ。と。名。つ。け。る。身。の
 移。ひ。の。い。よ。ま。と。ね。ど。おん。身。の。実。父。も。信。井。の。退。種。人。と。い。ふ。彼。赤。根。城。松。と。肩。を
 比。一。同。僚。の。り。よ。ま。ぬ。る。の。と。い。ひ。あ。ら。う。その。子。と。生。ま。し。う。ひ。も。あ。り。親。の。あ。ら。ぬ
 親。の。こ。ろ。よ。こ。の。兒。の。中。よ。ま。ま。り。彼。當。が。た。め。を。受。く。常。言。よ。い。氏。人。言。ち
 これ。おん。身。う。失。る。と。い。ふ。賊。に。吾。備。よ。字。ま。し。不。幸。を。歎。く。か。あ。ま。り。あ。り。さ。ら。い。ん
 おん。身。が。お。び。ま。の。実。又。よ。遠。く。ま。ま。り。て。未。し。の。り。く。え。あ。り。の。う。ら。け。入。乃
 奉。動。似。げ。ほ。と。え。か。と。く。その。素。生。と。告。親。の。悪。る。状。面。也。和。か。や。は。と。云。ひ
 身。の。今。こ。そ。め。つ。て。あ。れ。か。わ。れ。今。宵。の。中。も。頼。ま。ぬ。身。の。病。著。よ。息。絶。る。が。後。に
 おん。身。の。実。の。親。を。ま。る。は。の。ら。う。じ。ら。や。昔。ん。聖。の。ま。と。と。胸。の。絶。れ。を。お。も

とも世の悪報は禍神の身は憑りて軟かたりの程のぞひ恨和子と
 あふとよく嘆きてさすりもくを啼くところ口説敵く席薦ふり塵埃
 さ又啜咽る涙ぞ中せらるる全女の張つ所を檀弓弛ねどつ日と仰て歎息
 昔の主従今の奴子実の母よりと高は難育の恩と忘るる名を求るとも
 あひのひそとぬまよ老の後の病著と看痛るもの外より又あるも
 ありね今の令の情けしと父の仇あるより紙切て昔は天を戴く人ありて人よ
 わくも彼蟻松のつら祖父母の恩と縁のあれがそいつて赤根を放さず二十九年
 親をたがはれ難母の大病よめんと祈りも今の仇ある実父の為よこの方寸
 の乱まじり母の教へ何よせん等閑よせぬ全女がいつびひひくてもわたりぬ
 首途の真途の先鋒せん才が先鋒せん先志せん果する三途の河あり後と
 りの介の山あり車とあり死くその後には難育の恩をたがはれ進まじこれ今生の辞別

許し人とは回替もあふ又まあがる候も老の巻のりうらうらわし物つ張つ黄紙
 裳を揮拂ふるとと猛くまうおんととれが外面より忙しくあふ人ありて
 ぶらぶらと額を打合へる全女は四五五六ある折り落しと嘆き袖より扱ても
 ちがえ入口陟き門柱のれりうらうらと園を丹くして公領は焦燥のそ蘆の如くゆを
 とまじび四五六の此彼とんうらうらと眉根をうせ常ありあふぬ全女が顔の色の
 つつとらうらうらと懐の又何ぞ病體とる人のが端ちうらうらと臥して泣き掻ぬ
 るどて枕を進ませざるありほのよひ暮して奴子口説をきうけんんまが茶も
 残もあふるるそふと煎るあふると同慰まが全女の怪まじと額を拵け入る
 つつとらうらうらと風の吹てや十日あまう訪まが四五六の身よけまじと茶もよぬく
 酒も飲せと酒一瓢買ておんとつひつとを推禁め餓鬼の物を脾虫とやら
 私主が酒を喫ふべきおん病で牙ひらと拵ても鬼は角は撰ぬ燈臺打

志つぐば多ひぢまうりぬらう。それハ又情アリ。情アリハ和子もそ。只この修あつ
 叙しよくくと死しを究きうする姉母あねはは也。多おほひひうう後ごて全ぜん女にょハ天あまうちうち仰あやまま嘆なげ息いき。時ときハ
 ぬぬままびびぬぬががけけととども親おやの歎なげみみひひくくままて且かつく仇人あいつハ頭あたまをを繞まわせん。ころころ是こゝく
 ぞぞひひももへへととひひつつ又またをを奪うばひひられらばば晩ばん稻いねハ胸むねをを拍うままじじ。それそれ受うて安やす心こゝろととう令しづを
 捨すてす凍こめめははるるももるる。和子わこのの為ためられらばば。ころころくくみみ人ひととと恨にくみみひひそそ今いま鳴な鐘かねハ
 入い相あひ浪なみ速はや三さん街まちままりり巡めぐりりて物もの布ぬくくととひひらんらん。茶ちや粥じゆくをを炊かききててたたううべ
 ろろ人ひとととひひららままててええつつるる。流なが石いしののままよよとと恨にくみみ雄ゆうがが祇あま色いろははして眼まなこを
 瞪とらららじじ。巻まきとと握にぎりり。君子くんしハハ嗟あはれれ未まのの食けをを受うむむ。孔子くんしハハ盜と泉せんのの水みづをを掬くむむ。物
 識ものし人ひとハ常つねああももふふとと何なにとともも聽き解とけけばばりりよよ今いまここそそ多おほひひああつつられられれ。やや豫よ讓じやう
 がが舊ふる衣きハ買かひひともとも仇人あいつのの物ものととややハ受うんん。目め今いま復またとと怨うらみみのの刀やいば尖とがどどひひままややと
 ひひととりりどどちち又またをを抜ひて赤あか根ねがが名な薄うすとと二ふたびび三さんびび刺さすす。ぬぬきき。かかとと刀やいばハハ整ととの
 袴はかまのの借かりりととちちららふふ。斷つ離りるる。袂たもとのの隅すみくくままりりて門かど邊へ撲う地ぢとと投な捨するる。

庭にわハ降ふ布ふく初はつ雪ゆきふふ交まじるる。落お葉ははは彷彿ふたふたととままりりて。群ぐんととちちららふふるる。乞こ鬼おにとともも。とと執とくく。とと全ぜん女にょ
 がが門かど口くち狭せまとと乱みだれれ入いりり。悲かな田でん穀こく計けいののおおりり。して千せん日にち墓ぼのの花はなままのの世よままはは
 面おもてハハ縋すりり。とと手て次つぎがが手て属ぞくうう。張ちやう里りがが牌はい狄てきささももるる。奴やつハ物ものををれれてて。悲かな田でん垣かき下した
 のの一いち分ぶんとといいふふ。とともも足あとと洗せんせせぬぬ。新あらた賣う白しろ見みとと引ひ搦なめめてて。蔬しよ屋ゐや入いのの酒さけ買かひひ
 小こととくく運う歩ほとと閱みてて。前まへハ進すすみみ。二ふた人にん全ぜん女にょがが前まへ後ごとと。隅すみ廻まわりりてて。ととるる。
 巻まきををかかてて揮かりりぬぬ。左ひだり左ひだり。撞つとと投な著つまま。筋すぢ斗とをを打うてて。竹たけをを打うてて。跳は躍うつつままとと
 むむととくく。競きやうひひ菟うるる。乞こ鬼おにとともも。右みぎハ柱はしら左ひだりハ當ありり。或あるハ踏ふ倒たおれれ。踏ふみみとともも。
 人ひと努ゆるる。れれハ物ものとともも。甚おほくく。晩ばん稻いねハハもも危あやうう。とと鳴なるる。もも鄰とな家かハ遠とほくく。救すくみみ
 小このの老らうのの身みハ腰こしハハ癱おてて。まま由ゆゆゆむむ。全ぜん女にょハ母はは親おやのの側そば杖つゑももやや整ととのとと

おこりて臥房かき掃ふまごふありにりまご。全みハあつて飲び。活業は假托つ。日みく平城へ交加て竊み赤根半々進を寤れ。いども。晩橋あぬぬく匿して来りみよこまをまごせむ。さうれ彼老媪と。その性伶俐ののると。大和へ来つる。さうれ。全みか。つ。流を精して。まのびくふうち歎けど。如此に定まらぬの多れば。禁る。ゆもあつて。さうり。り。時。天文二十年。春二月の頃。と。よ。平城ありけし。筒井の館あり。大和女頭。傍。一日赤根半々進。張雲。曾太郎。赤根。召は。て。士庶の賞罰を定らる。事の序。よ。宣ふ。やう。汝達。豫て。ま。ま。る。ど。く。近日。柔谷山。よ。夜。み。く。妖。光。あり。その。氣。地。中。より。起りて。中天。よ。立。の。ゆ。り。山。鳴。り。谷。震。て。草。木。あ。れ。か。馬。よ。格。調。を。う。り。管。林。ホ。ガ。訴。報。願。よ。こ。ろ。よ。か。く。ふ。と。の。う。ら。り。こ。ま。

昨夜。み。ら。ら。ら。城。櫓。み。登。り。て。迫。み。米。谷。の。方。を。瞻。望。ま。は。現。中。一。赤。氣。天。子。冲。て。煙。の。如。く。霞。よ。似。し。り。ま。ろ。れ。バ。是。官。林。ホ。ガ。告。と。ま。妄。談。よ。あ。ら。ば。借。物。を。案。じ。ま。る。に。ま。ま。ハ。此。往。時。享。祿。二。年。の。春。先。考。原。彼。山。あり。本。精。の。出。流。湊。ん。と。と。楠。の。根。々。に。瘞。め。ひ。し。り。が。家。の。宝。劍。し。る。風。流。士。の。為。と。こ。ろ。よ。あ。ら。ば。や。和。漢。の。史。傳。よ。考。ま。ま。と。ま。千。早。振。神。の。代。よ。山。田。大。蛇。ガ。尾。頭。より。出。る。劍。ハ。常。に。雲。を。起。せ。し。る。天。叢。雲。と。名。つ。け。ら。れ。を。人。の。代。と。あり。て。日。本。武。尊。草。薙。と。ま。ま。び。う。え。て。樹。枝。へ。か。け。ま。ひ。し。る。に。劍。より。火。り。え。出。く。忽。地。その。樹。を。燒。し。る。熱。田。の。神。と。祝。ま。ま。し。り。又。異。朝。あり。晋。の。時。半。牛。の。同。一。忽。然。と。雲。氣。の。立。升。る。と。有。り。時。の。大。臣。張。華。と。い。ふ。り。の。あ。ら。く。こ。ま。を。怪。し。り。博。士。雷。煥。と。い。ふ。り。の。よ。同。く。雷。煥。と。い。ふ。り。の。宝。劍。の。

柔ふて侍り。りー最上の劍けん一々中ちゆう小理せうりあるとあるとたれら。その
 氣きの天てんは沖ひつりとあり。疑うたがひめかえらる。つひに張華ちやうか有理げりとたいめ
 晴はりて強ちゆうて雷らい煥くわんと豊城ほうじやうの令れいとして伴ばんの如ごと遣つらせし雷らい煥くわん獄ごく舎しゃの
 基もとと堀ほりて一の石函いしのまとあり。潜ひそか閑ひましてとんと内うちは両口りやうくちの宝劍ほうけん
 あり。銘めいを刻きして龍泉りゆうせんといひ太阿たあと命めいく。その夕ゆふ斗牛とぎうの間まはまじ
 紫氣むらさき復たがええとつて雷らい煥くわんの南昌なんじやう西山ししやんの士しとして即すなはちこれと拭ぬぐて
 上うへのるれ宝劍ほうけんあれば京師きやうしへ使つかを遣つらして。その一口いこうと張華ちやうか小せうと一口いこう
 潜ひそかとめて。ちのまをれを帶おびてとと龍泉りゆうせん太阿たあの二口にこうは干將かんじやう莫邪まつか
 の劍けんとまあり。文ぶんの道みちあり疎そらぬ半はんと進しんが為ために説せつば釈迦しやくぢやの如ごとの
 説せつ経きやうは似にれど。かゝる和漢わくわんの例れいをありふら。ともかゝるころのまがら。
 先考せんかう陰陽師いんやうしの言ことば紫氣むらさき信しんと家室けあつの大口おほくちとあり。深山しんせんは瘞しやく

むひとあり。今いま不至こて二十條にじゅうじやう年ねん。遂つひは人間にんげんは冷ひやてま。されば彼
 大口おほくち不ふ靈れいありて主まと暮くひ光ひかりを頭あたま。されとて曉あけとむ。是こゝも疑うたがは。
 却かへてその崇たかむらん半はんと進しんの聖あはつとあり。不ふ谷た之の卦くわい。彼か本ほん精しやう塚づかと堀ほり
 茂さかして風かぜ流りゅう士しの大口おほくちとあり。未まとま。とつて六む件けんの奴やつ火ひも。ちのづらと滅めつつて。
 勢いきと懈ゆるる正ただあり。と大息おほいき吐つて直ただふ。赤根あかね蟻あなご松まつ面めんをあり。且かつく
 回くわい答たもせ。ほが曾そ太た郎らうの半はんと進しん。今いま新あらたく小孫こひまをま。殿とのの宣のたまひ
 とる。疾はやし。とあり。ちのづらと當あた初はつ先せん長ちやう風かぜ流りゅう士しの宝たから力ちからと瘞しやくめ。本ほん谷た山さん
 ある。本ほん積つみの紫むらさきと壓おさむ。ひとあり。の君きみ弱じやく少せうのおん。とあり。まはせ。とあり。
 ものあやあふんぼらん。つと憚おそる。やと憚おそる。ひとあり。ひとあり。永えい正せいのそ。先せん君きみ
 茶ちや亭ていと造つくらん。とあり。良よ材ざいと求もとめ。とあり。彼か本ほん谷た山さんとあり。大おほ楠なん樹じゆとあり。ひとあり。
 う。そのま。赤根あかね蟻あなご子こが。とあり。君きみの。とあり。おん。

ありて。乃又子の間快らば。既するのんせし。後よ。これる赤根半進
 及厚金三郎太夫が。あまふと。ややく無異の。おさふり。後。遠ふ
 崇る。はるは。うて先君。忽地。猛る。と。を。和。れ。彼。陰。陽。師。が。手。に。小
 後。い。ま。う。二。口。の。宝。刀。風。流。士。風。流。女。と。共。せん。と。華。洛。六。條。の。刀。研
 同。樹。と。す。り。の。夜。百。一。ひ。い。よ。同。樹。失。て。砥。石。よ。う。ち。中。陽。の。大。刀
 一。る。風。流。士。の。刃。尖。と。些。毀。ら。う。これ。程。さ。る。難。度。の。ま。と。格。別。の。思。免。と
 加。ら。れ。同。樹。と。そ。か。さ。追。え。され。ふ。彼。り。の。い。う。く。羞。て。や。京。も。足。を
 駐。り。と。妻。子。共。に。逐。電。せ。う。その。比。風。軍。の。ひ。と。隨。て。風。流。士
 風。流。女。と。二。口。が。ら。瘞。ん。と。定。め。れ。る。る。あ。あ。と。先。君。の。情。を
 り。の。あ。ま。う。風。流。女。の。大。刀。を。箇。め。の。代。と。て。る。月。外。よ。瘞。り。ま。さ
 り。の。や。あ。ると。室。庫。を。索。さ。う。も。と。れ。よ。さ。く。る。り。の。も。は。い。難。て

陰。陽。師。よ。如。此。の。よ。と。告。兩。口。の。大。刀。を。残。す。あ。く。瘞。ん。と。ら。う
 あ。は。陰。の。う。え。刃。尖。も。毀。れ。た。れ。が。の。一。口。を。瘞。ん。と。あ。ふ。り。吉。山。の。小
 と。同。せ。の。ふ。子。彼。陰。陽。師。各。て。ま。う。さ。う。陰。の。大。刀。の。刃。の。虧。し。た。れ。も
 物。の。性。の。所。為。で。ゆ。め。る。ま。つ。る。に。う。付。各。あ。り。て。陰。の。大。刀。を。箇。め。の。代。
 壓。勝。の。剱。も。う。ひ。る。く。ゆ。ん。致。大。刀。の。眼。前。あ。り。て。後。の。崇。ま。り。の。ま。ま。に
 亦。ん。ば。あ。ま。執。疑。し。の。ふ。や。用。ひ。の。ま。ね。が。是。非。及。び。て。枉。て。一。刀。を
 箇。め。ん。と。あ。ま。の。塚。の。う。ら。う。二。墓。の。禿。舎。の。建。立。し。嚴。嶋。の。辨。財。天。と
 志。貴。の。毘。沙。門。を。勧。請。し。も。く。ま。う。ふ。後。の。殊。危。を。代。方。ま。う。ら。う。と。ま。ま
 と。あ。り。ま。ん。これ。別。辨。財。天。の。風。流。女。の。大。刀。を。代。毘。沙。門。天。の。風。流。士。の
 刃。の。毀。て。る。と。補。ふ。の。も。の。思。ひ。ま。う。愛。情。の。あ。ま。ま。の。ま。ま。陰。の。大。刀。を
 箇。め。ん。が。その。餘。波。女子。小。茶。て。ら。子。孫。の。患。を。ま。ま。下。努。慎。ま。ら。ば。

一と真言憚るまもあし。楠がたつた敷く抑伴の陰陽師博士の
 言えたりしすく。南朝の大臣北畠殿の度流りて村に宛実と
 數世清貧を樂て。南朝よ賣し。僅一口を餓ふといふもト並況相
 妙あり。我朝にて春親晴明漢土にての京房郭璞さんどいふ
 し。これよ加づるいふるし。惜む。宛実の身やうりて十年ふ
 あすのゆひるん。その先君伴の勳文を半の信し。半の疑ひ遊り
 風流女の大刀を圖て。風流士の大刀をのみ。平谷よ瘞さく。本精塚の
 東西よ二基の禿舎を建てる。嚴鳴の辨妙天女と。志貴の昆沙門天を
 劫清し。いひたり。そのあや。君臣和順。赤根の志孝の名を揚ぐ。更
 その家と都。館六福のまうらつて。槐庭のあひゆり。むと大内殿へ
 入興し。のころ義隆。當家の室室風流士風流女の両刀あはし。と

中目及び婚縁の叙せりて。兵願懇望し。先君これと推辞する。と
 する。風流女の大内殿へ贈り。むらゆひ。と
 する。近曾故あり。件の室刀を。執権陶晴賢が主君大内殿へ
 まじ。賜り。秘系と。つと。さ。ま。か。移。て。宛実が。い。ひ。つ。と。を。此。彼。と
 といひ。あ。の。い。く。は。先。君。惜。て。圖。り。ひ。し。風。流。女。の。一。刀。も。遂。に。當。家。小
 室。に。遠。く。大。内。家。の。有。と。ある。と。而。於。あ。る。と。い。ふ。彼。嚴。島。の
 毎。て。大。内。殿。の。所。領。あり。加。藤。彼。室。刀。の。刃。を。毀。る。刀。屋。同。樹。と
 異。よ。都。を。逐。電。して。今。周。防。山。口。の。母。と。り。に。在。と。於。此。に。る。ゆ。ゆ。い。ひ。
 これ。も。又。あ。り。げ。右。轉。と。い。ひ。あ。の。さ。る。の。も。い。は。物。の。怪。異。あり。と。し。
 あり。と。先。目。の。心。志。あり。情。あり。ゆ。ひ。て。件。の。本。精。塚。を。毀。し。室。刀。を。り。ゆ。
 あり。と。月。本。の。賢。れ。に。ころ。ふ。齟。齬。あり。と。物。作。は。國。家。將。よ。與。んと

とうと死の必復祥あり。國家將よ亡んとするにたへ必妖孽あり。著龜お
 見んま四體も動く。齊王三の善言をりて。禁惑退く。三度といひ。
 發塚のりめ。努力をいひ。すまひて。本谷の兩社へ幣帛を進ト。又
 奥福寺の大家と。延清と。禍胎を禳。一ものを願。くゆと。言。多。坂。場。
 道理を述。面を托。と。諫。り。諸侯も争。臣。人。あ。れ。ば。亡。道。の。忌。と。い。ふ。も。
 その國を失。つ。ごと。聖。諸。も。ま。よ。い。あ。か。さ。松。誠。忠。の。死。あ。の。通。り。
 ま。さ。高。を。操。ハ。題。ま。さ。順。勝。え。本。大。度。あ。し。諫。を。容。り。と。茶。海。の。如。
 是非。決。断。し。も。あ。て。流。と。決。さ。如。く。あ。り。か。の。時。先。代。の。餘。殃。あ。ら。ば。
 萌。へ。も。因果。あ。や。あ。り。ん。忽。地。よ。本。及。ま。り。童。扈。從。よ。念。一。刀。を。
 取。て。反。ら。ち。り。し。や。され。曾。太。郎。汝。が。賢。氣。あ。る。婦。女。子。然。が。渡。り。け。し。と。
 男。が。ま。し。ひ。め。さ。ん。め。難。く。そ。れ。は。與。と。ま。ま。夫。女。の。徳。よ。勝。ぶ。草。木。元。は。

非情あり。彼本谷の老翁。既。伐。ら。ま。て。舊。根。の。朽。さ。う。いつ。て。當。り。
 り。と。と。あ。ん。の。や。鬼。魅。罔。面。と。い。ふ。の。あ。り。て。彼。本。よ。托。て。奇。怪。を。る。ま。
 と。も。これ。は。是。領。ま。さ。う。且。武。を。以。國。を。治。む。の。武。徳。あ。い。え。申。傍。せ。され。が。
 斂。ハ。牙。を。備。り。人。を。征。一。威。徳。を。信。と。神。策。の。一。種。あ。る。よ。陰。陽。師。よ。説。惑。
 され。家。室。の。大。刀。と。女。に。も。土。中。に。埋。め。の。ひ。ん。思。あ。る。と。あ。が。ら。こ。ま。全。く。
 先。考。の。お。ん。悟。と。こ。そ。あ。ま。れ。な。い。ふ。と。あ。れ。が。慢。は。大。刀。を。埋。ん。と。ま。ひ。ひ。ひ。
 急。う。風。流。士。の。刃。の。毀。う。され。が。彼。因。樹。と。や。ん。の。結。あ。る。の。と。時。と。れ。よ。
 慢。て。刃。を。毀。せ。ら。う。宝。刀。の。妙。は。あ。り。や。何。ぞ。や。加。減。年。を。経。て。大。内。が。所。置。
 任。し。風。流。女。の。大。刀。と。入。彼。如。贈。り。も。ひ。ふ。又。の。武。徳。忽。地。衰。へ。の。次。の。年。
 幸。も。ひ。つ。亦。是。件。の。大。刀。と。も。を。失。ひ。も。ひ。な。よ。あ。ら。ば。千。か。て。又。つ。且。こ。の。も。
 祥。の。う。ら。ね。ば。玉。枕。を。娶。う。て。う。駭。の。年。を。経。よ。けれ。ど。ま。男。子。と。つ。あ。り。の。死。



あつねを

あつね



あつね

あつね
 主君
 曹太郎
 北七
 回七
 諫七

帯おびする小刀こばの忽たち然ぜんと腹はらを左ひだりの股またでつかり。あつたに母怪ははあや死しのこの
 疾はやへさつるれども。刀尖やいばは著つる鮮血あざをひく。拭ぬぐきに後あとで拭ぬぐひもこれ
 まて焼著やるに異ちがふ。これも又彼風流士かぜりゅうしをとり復たさば。武徳ぶとくはく
 衰おとろへ戦場いくさばは牙こゝろを殺ころすと前象まへさうあやあんどんか。そむかへ練ねんは独ひとり狗死いぬし
 とぶく練ねんめゆせよ。つややつ。敦圍とんゐで刀尖やいばをつれ著つつ。今一言いまひとことか
 ちうさへ曾そ太郎たろうの忽たち地ぢは比干ひかんか骨ほねとも裂さる。佐子さこ骨ほねか鳴夷なるいあも盛も
 べく。とも危あやく。ええ。うに城しろの些ちも強つよが。肩衣かたぎの腋わきの。袴はかまの積つを
 押おひらめて刃やいばの下したは牙こゝろを搦とり。母練ははねんと志こころは。赤根あかねの吐あ嗟なげと推隔おしへで。
 その牙こゝろと痛いたは順勝じゆんかつの極たぎり。ららひ。刀やいばの際はし楚しと取とり凝著こりつる。り
 刀尖やいばの鮮血あざを信しんとら観かんつ。左手ひだりてを衝つて頭かぶを低ひ。目め且かつく。口くちを凍こめて。いて。
 まうは所ところを測はから。曾そ太郎たろうが練言理ねんげんりのふ似にられ。も君きみと交まじり上うを
 犯かす。是これも真まことの忠臣ちゆうしんあ。半はん進しんも死した。たも右みぎも。君きみ命いのちに従したがひ。なうて。
 采谷山さいやまへ馳は向むかひ。本精ほんしやう塚づかをうらひ。死して。宝刀たからざしを復たし。進しんせ。る。こ。一箇ひとつの
 願ねがひあり。つ。許ゆるさせ。ま。ま。と。の。順指じゆんさし面めんを和なげ。汝なんぢも曾そ太郎たろうも其その
 い。練ねんもあつ。べ。飲のむ。ひ。る。に。さ。ら。く。て。予われを教しむ。言こと語ごを答こたへ。底そこ
 ん。え。悦よろこぶ。有あり。と。願ねがひ。死しの。何なにも。と。仰おほせ。頭かぶを奉たげ。世よは禍わざはひを禳たごふ。と。死し
 形代かたしろを用もちて。と。あり。これ。天恩あまのめぐみの餘波あまなみも。重九上ちゆうきゅうじやう己この流なが。雞けい又雷鳴かみなり。月つきの
 河社かしゃ全ぜんく。女子むすめの戲あそぶ。愚おろか。按おめ。げ。じ。ゆ。今いま君きみの威徳いとくも。采谷山さいやま乃の
 塚づかを發はす。宝刀たからざしを復たし。も。つ。ん。ま。の。ゆ。ま。あ。の。あ。の。小佩刀せうはいを
 鮮血あざは汚けら。その血ちの拭ぬぐひ。ま。ま。これ。又。切きり。快たく。は。う。て。あ。の。佩刀はいを。
 半はん進しんは。あ。つ。つ。別風流士べつふうりゅうしの形代かたしろを。復たさ。る。塚づかも。これ。を。埋くめ。の。刀やいばを。り。て

まうは所ところを測はから。曾そ太郎たろうが練言理ねんげんりのふ似にられ。も君きみと交まじり上うを
 犯かす。是これも真まことの忠臣ちゆうしんあ。半はん進しんも死した。たも右みぎも。君きみ命いのちに従したがひ。なうて。
 采谷山さいやまへ馳は向むかひ。本精ほんしやう塚づかをうらひ。死して。宝刀たからざしを復たし。進しんせ。る。こ。一箇ひとつの
 願ねがひあり。つ。許ゆるさせ。ま。ま。と。の。順指じゆんさし面めんを和なげ。汝なんぢも曾そ太郎たろうも其その
 い。練ねんもあつ。べ。飲のむ。ひ。る。に。さ。ら。く。て。予われを教しむ。言こと語ごを答こたへ。底そこ
 ん。え。悦よろこぶ。有あり。と。願ねがひ。死しの。何なにも。と。仰おほせ。頭かぶを奉たげ。世よは禍わざはひを禳たごふ。と。死し
 形代かたしろを用もちて。と。あり。これ。天恩あまのめぐみの餘波あまなみも。重九上ちゆうきゅうじやう己この流なが。雞けい又雷鳴かみなり。月つきの
 河社かしゃ全ぜんく。女子むすめの戲あそぶ。愚おろか。按おめ。げ。じ。ゆ。今いま君きみの威徳いとくも。采谷山さいやま乃の
 塚づかを發はす。宝刀たからざしを復たし。も。つ。ん。ま。の。ゆ。ま。あ。の。あ。の。小佩刀せうはいを
 鮮血あざは汚けら。その血ちの拭ぬぐひ。ま。ま。これ。又。切きり。快たく。は。う。て。あ。の。佩刀はいを。
 半はん進しんは。あ。つ。つ。別風流士べつふうりゅうしの形代かたしろを。復たさ。る。塚づかも。これ。を。埋くめ。の。刀やいばを。り。て

誰よりあつんと安らさるるもあめりめと棟梁の臣やして大禄を食ふがら。
 巾邊の一言も疎まらざれば塚を覆ふ。宝刀を取る。おん使をうけり。嬉し
 自らのあつらひをばと肩とまじし巾邊といひおん使に入らりて物を推道理
 小背く。これ由本精の宗あて。條怒主従が皮膚ふりけ入り。かくまで狂なる
 飲つれあすてや高く。忠孝の名を揚ぐる。巾邊あればさああはじ。良より
 ての同僚あり。つがねの内足音の滑よあふ青ありとも。これあつらひるべし
 あらど。実よ米谷並。赴きて塚と覆ふ。宝刀を取てぬり。宗とあひしり。飲
 つつと。と小勝ととも。眼つめり。忠臣の齒よ衣よせぬ。言の葉あり。いと
 涼し。やゆとど。のくもえとら。冷笑ひ物。や塚松生米谷よ丸の。つとこ
 本精の宗。飲宝刀の宗。飲神あり。ばあつらひる。あつらひる。楚といひ。定ぬ
 宗。あつらひる。眼前。君の命を背く。とれい。忽地。は躍り。うひり。この身は市小

棄れて。妻子の路頭。は飢つ。又米六ハ米谷の桶を代て家と與せむ。
 つがね。あつらひる。彼。舊根。を。推。錢。村。と。あつらひる。と。あつらひる。と。あつらひる。
 主命を否とす。宗よゆい。と。や。米谷へのおん使。仔細あり。と。圓。答。も。あつらひる。
 あつらひる。と。立。も。果。む。刀。の。瑞。樹。く。け。禱。の。裾。を。横。地。と。押。而。漢。の。王。蒸。ハ
 士よ。と。舟。の。田。氏。ハ。比。周。と。是。彼。國。家。を。奪。ふ。と。至。る。と。君。と。あつらひる。の。外。奸。使
 け。と。東。雄。の。ま。と。進。と。も。あつらひる。と。あつらひる。と。あつらひる。と。あつらひる。
 婿。と。も。教。を。通。宗。の。好。ハ。私。と。の。任。人。を。怒。ら。て。禍。の。根。を。断。ん。と。あつらひる。
 と。敷。團。あ。つ。と。牙。を。ひ。び。して。接。か。る。刃。ふ。と。争。ひ。を。回。扇。を。以。て。推。せ。め。早。り
 の。あ。つらひる。と。あつらひる。と。あつらひる。と。あつらひる。と。あつらひる。と。あつらひる。
 め。て。の。臂。を。沈。は。て。勢。ハ。猛。く。又。接。か。る。瑞。を。能。で。搦。う。と。牙。を。突。著。て。礮。と
 坐。し。の。對。ひ。せ。ば。今。も。情。む。と。あつらひる。と。あつらひる。と。あつらひる。と。あつらひる。
 坐。し。の。對。ひ。せ。ば。今。も。情。む。と。あつらひる。と。あつらひる。と。あつらひる。と。あつらひる。

らうあざむ。足這は先と踏き入り。天その孤たを憐て國の難を禳へし
 のり。彼周公の金勝の書ふてびに這が為申投んと。今古有るは
 続井の家の柱石と赤根山の楠と共折入聖なる誰とぞありあう居を
 佐ん。舟の標社ハ匠石も。人々ふびてとこと。壽一と曾太郎が。うあぞ
 人ゆふべけれ。ぢひ地とあへん。あまふらまう。まじりけり。いと慰む
 勃解まは赤根へうち長次右臣へ終は臨て言必し。由私門は及びば。ど
 うが妻怒ハ此迄の姉と妹あり。うら子ももらへ。此迄の外任あり。何とぞ
 おのし遺さ。さ。のあは脚言人ト。笑く。誘も。そのせ。曾太郎
 まづ。嗟嘆。つ。う。を。あ。う。と。あ。あ。ぞ。ゆ。と。列。の。若。石。南。渡。と
 どのふ。園。移。て。ら。う。は。送。り。送。り。屠。石。の。歩。の。末。へ。過。て。漏。り。書。く
 申の時枝は離る。槐の回より。ひびく障子の不。と。の。と。ら。續。つ。つ。

後ふ。あ。り。先。は。ま。ま。と。ぞ。退。出。り。正。小。を。あ。ら。う。と。か。移。り。あ。り。人。が
 あ。づ。さ。ら。る。た。う。む。つ。る。名。を。ぞ。と。む。と。誦。さ。ら。る。あ。る。ぞ。か。け。復。あ
 赤根半之進。曾太郎は別まら。宿所は歸り。さそ三勝ま。七。あ。い
 對ひ。俄頃の仰と稟。これ。聖。の。末。時。は。記。り。て。赤。苦。山。へ。赴。く。は。と。や。え
 志。は。ま。ま。三。勝。の。熟。と。良。人。の。顔。を。う。ら。瞻。り。あ。ら。う。た。婦。女。子。の。愚。癡
 ろ。あ。も。ま。ま。む。む。は。れ。ど。何。と。や。ん。顔。色。の。ゆ。く。ん。え。さ。せ。あ。と。ぞ。ゆ。め。と。あ。く
 け。ま。れ。彼。赤。谷。の。物。の。怪。ハ。阿。翁。の。時。は。室。瓦。礮。世。縁。を。あ。り。ま。ら。ま。く
 縁。より。傳。へ。て。忌。憚。は。傳。り。の。と。人。も。と。ま。う。た。ま。この。あ。ん。使。と。承。り。あ。ま
 形。は。と。に。傳。り。ま。あ。と。や。推。辞。あ。ら。う。と。眉。根。う。ら。額。井。つ。練。ま。ば。ま。せ。も。又
 又。と。練。て。母。の。室。入。下。理。と。こ。を。お。母。え。は。勝。母。の。里。に。車。を。あ。り。下。朝。歌。の。布。に
 杖。と。曳。む。名。の。ま。じ。ま。と。と。君。子。の。忌。子。の。次。り。か。家。は。堂。張。り。せ。し。末。精。様。を

遺る。物持多しゆびと。とつせものあぶま。進ハ呵と。うら笑ひ。武士の
 家。侍りの。百万騎の敵陣へ。馳入らん。こま常之君の為。あつた。を満
 び。うらの。と。推陣。うら。怪。えて。怪。散。び。うら。母。を
 とも。あれ。ゆ。あ。れ。守。た。又。が。蹟。を。踏。ぎ。身。を。り。いと。女。に。必。人。を。笑。れ。を
 と。取。ゆ。あ。れ。福。が。神。も。で。奴。の。底。を。を。る。よ。も。勸。よ。羞。る。む。守。七。母。奴。と。目。を
 注。し。う。然。然。と。う。わ。て。こ。べ。た。あ。ゆ。ね。が。三。務。の。う。ら。松。平。他。許。人。を。去。り。て
 記。り。於。茶。谷。の。り。を。告。せ。り。後。若。私。車。炊。妻。あ。ん。ど。その。り。ど。よ。分。付。て
 主人。が。約。結。態。の。准。儀。あ。ど。と。る。行。は。園。花。平。他。曾。太。郎。亦。こ。よ。預。来。て。儀。別。を
 め。せ。り。そ。か。中。小。曾。太。郎。の。も。ま。ま。進。が。死。を。究。一。孤。老。の。赴。と。ま。り。て。け。し。ば。
 之。の。中。許。に。て。樂。ね。ど。わ。か。や。ま。ひ。定。め。と。と。れ。う。と。の。妻。子。に。去。り。て。
 名。残。と。之。へ。曾。太。郎。平。他。園。花。平。他。園。花。通。骨。酒。り。好。び。鶏。鳴。曉。を
 生。り。比。よ。せ。し。く。打。扮。つ。筒。井。金。綱。の。陣。羽。織。は。勝。村。辰。子。の。野。袴。を。穿。か
 筑。紫。襪。治。が。打。う。ら。る。二。人。又。寸。の。腰。刀。は。恩。湯。の。お。ん。佩。刀。を。夾。副
 家。よ。ひ。さ。く。仕。し。る。私。車。丹。三。ホ。八。九。人。の。奴。隸。を。お。て。陰。を。持。し。燈。櫃。を
 擔。し。轎。子。を。昇。し。つ。ま。出。ま。へ。三。務。園。花。と。は。う。ら。二。人。の。子。ども。様。松。由。
 ち。う。よ。ひ。ひ。る。死。人。を。送。り。て。これ。や。の。世。の。別。ま。と。ら。あ。る。も。あ。る。ぬ。も。立。つ。く。
 濡。ら。次。ハ。お。る。と。袂。あり。り。

古夢南柯後記卷之二終

